



瀬田の丘裏庭版

主任司祭から瀬田の兄弟姉妹へ

主任司祭 小西広志 神父



創刊 2022 年

編集協力・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部 東京都世田谷区瀬田 4-16-1

百貨店



広島に行った。久しぶりに百貨店に入った。お目当ては最上階のレストラン街である。少し洒落た飲食店が何軒かフロアーにあった。一軒の蕎麦屋に入った。

蕎麦を待っている間、考えた。

そういえば、昔は百貨店の屋上には大食堂があったものだ。年に数回、家族で出かけたものだ。わたしがお子さまランチを食べている間、両親はビールを楽しんでいた。見渡すと、ささやかだけども交わり満ちた家族連れで大食堂は賑わっていた。大食堂では、和洋中、どんな料理でも食べられるのが楽しかった。食が終わって、外に出て、食品サンプルが飾ってあるショーウィンドウをもう一度見ながら、「今日は何を食べる？」と子どもたちに聞いてくるのが父のいつものジョークだった。

そんな大食堂はもう百貨店にはない。屋上の子どもたちのための遊園地もない。百貨店の中は閑散としている。人だかりがあるところに興味本位で向かってみると、そこはペット売り場だった。

今の子どもたちは「ハレの日」に家族で百貨店に行くことはないだろう。そして、おもちゃ売り場で目をキラキラさせておもちゃに触ったり、ペット売り場にいる小動物に触ったり、爬虫類におっかなびっくり手を伸ばしたりするのではないだろう。青い空の下、屋上の遊具につかまってクルクルと回ることもないだろう。屋上から見える街の景色に驚くこともないだろう。

今の子どもたちは、百貨店というちょっと高級な品物を扱う専門店の集合体である販売店を体験することはもうないだろう。彼らは、買い物「非日常」の体験であることも知らないまま育つ。そんな子どもたちが多くなったら、もう

百貨店を必要とはしなくなる。郊外にある均一な商品だけをそろえるショッピングセンターで十分だ。バラエティに富んだ食事を提供してくれる最上階の大食堂はもういらない。名前だけが先行する屋台のような店が寄せ集まったフードコートと呼ばれる場所で、炊き出しよろしく食べるだけだ。

恐らく、百貨店はなくなるだろう。事実、地方都市の百貨店は閉店している。もう、おもちゃを子どもが手に取って選べる店はなくなるだろうし、たくさん並んでいる本の中から好きな本を選べる書店もなくなるだろう。

そんなことを考えながら、蕎麦をたぐった。

子どもたちが、モノを選んで買うという購買の習慣を身につけなくなっておかげで、小売店は生き残れなくなる。なぜなら、その子どもたちが大人になったときに、「ハレの日」に買い物に出かけて行く

ことはないからだ。実店舗での買い物とは、せいぜい家の近くのコンビニエンスストアぐらいのものだ。本を手取る習慣もないから、仮にネットがあったとしても本を買うなどしないだろう。

こんな子どもたちが、たとえ洗礼を受けていたとしても、大きくなったら、もう教会には来ないだろうなど、わたしは悲観的に思う。彼らにとって教会は「ハレの日」の「ハレの場所」ではないからだ。

教会も同じかもしれない。子どもたちにとって教会が、「ハレの日」に訪れる、特別な場所という意識が薄らぎつつある。教会の聖堂が特別な場所という感覚が失われつつあるようだ。教会も、教会で、祈る信仰の共同体も、そしてそこに集う様々な人々の姿も、今の子どもたちは体験していない。

それに加えて、大人たちの我が儘が今の教会に横行している。彼らは小さな子どもたちを受け入れない。ミサ中にちよつとでも子どもが騒ぐと、ギロリとにらみつける。「泣き部屋」に行けと若いパパとママに対して凄む。子どものおかげで祈れないと不満をもらす。「だったら、お前らの子どもや孫を一人でも教会に連れて来い。このご時世に小さい子どもが教会にいただけでも有り難いじゃないか！」と怒りたくなるが、それをするとバワハラだそうだから、わたしも黙っている。わたしも変に大人になったものだ。

ている」と反論が来るだろう。しかし、百貨店の話じゃないが、子ども時代に体験しなければ、大人になっても体験できないのだ。いや、そもそも社会自体が次の世代に貴重な体験と素晴らしい習慣と美しい思い出を与えるだけの力を失っているのだ。

来ると「わたしのことを認めてくれる人たちがいる」と思えるような関わりが必要ではなからうか。子どもの時の体験は、大人になっても生きると信じている。わたしも子どもの時の小さな教会体験が、今のわたしをつくっている。

どうしたらよいのだろう。答えはわからない。少なくとも教会に

そう考えて、そば湯をグツと呑んで、店を後にした。

願い ご聖体の祭日に寄せて



教会に集う小さな子どもたちを見ていて、「早く、この子たちが

受験をひかえた小学生や中学生

ご聖体をいただけるようになってほしい」と願っています。初聖体

の子どもたちを見ていて、「勉強も忙しいだろうけど、たまには両親とミサに来て、ご聖体をいただ

いてほしい」と願っています。塾

の勉強よりも、習い事よりも、ご

けるよろこびを味わってほしいからです。そして、教会のたくさん

の大人たちが「おめでとう」とくちぐちに祝福してくれる体験をし

てほしいからです。

す。

子どもがいらない教会は遅かれ早かれ滅んでいく。子どもたちは教会の希望だ。「そんなことは分かっ

たくさんさんの活動で忙しくしてい

る中学生や高校生、大学生の青少年を見ていて、「いつでも教会に
おいで。ご聖体のイエスさまはい
つもあなたを待っているんだよ」
と、このろの中で語りかけてい
ます。「特に、つらいときには日
曜日のミサにおいて。七時のミサ
だったらあんまり人に会うことも
ないから」と願っています。親友
よりも、家族よりも、青年たちの
気持ちを分かってくれているのは
ご聖体のイエスさまだとわたしは
思っています。

二十代の若者たちに声をかけた
いのは、「一年に一回でもいいか
ら、ミサでご聖体をいただいて。
ご聖体がイエスさまの御からだで
あることが信じられなくてもいい
から、ご聖体をいただいて」と願っ
ています。それは、わたし自身が
若者の頃、ミサに行けなくて、ご
聖体をいただけなかった苦しい時

を経験しているからです。できれ
ば、こんな経験を青年たちにして
ほしくないからです。

結婚をして家庭を築いた若い
カップルには、「パートナーを教
会に連れてきて。ご聖体をいただ
くあなたを見て、あなたのパート
ナーはきつとあなたのことを大切
に思うようになるから」と願って
います。ご聖体をいただく姿を見
て、何をこの人が大切に生きて
いるかが他人には分かるからで
す。そして、この人が大切にしてい
るものを、一緒に大切に守って
あげたいと思うからです。

仕事で忙しく働く人々には、「あ
なたの仕事のきびしさ、つらさは、
ご聖体のイエスさまがよく分かっ
ている」と、このろの中で訴えか
けています。『皆これをとって食
べなさい』と最後の晩餐で言われ

たイエスさまのことばは、あなた
が仕事でがんばっているときにも
あなたのところに響いているんだ
よ。だから、ご聖体をいただいて
ください」と願っています。

人生の秋を迎えつつある壮年の
人々には、「頻繁にミサに来てく
ださい」と願っています。遊びに
行くのも楽しいでしょう。趣味な
どのサークル活動で交友を深める
のも意味があります。しかし、人
生にあつて、深い交わりを体験で
きるのにはミサしかないのです。ミ
サには神さまとの交わりがありま
す。人と人との交わりがあります。
ミサに与るたびに、いままでの人
生を振り返って、今の人生に感謝
して、明日への一步を踏みだして
ほしいと願っています。

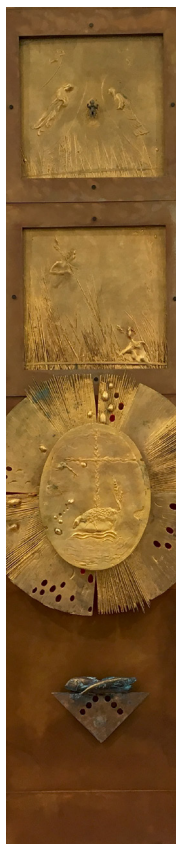
高齢の人々には、「ミサに來ら
れてよかったね。あと何回、ご聖
体をいただけるのか分からないけ
ど、できれば最後の最後まで教会
に來られますように」と願ってい
ます。死の恐怖が差し迫る人々に

とつては、ご聖体はなぐさめにな
ると信じています。

死の床にある人々には、「もう、
ご聖体拝領は難しいかもしれないま
んが、ご家族が信者さんだから、
代わりにご聖体拝領してもらいま
しょうね」と願いつつ、病者の塗
油を授けます。死の瞬間は大きな
誘惑の時です。その時、ご聖体は、
その人にいつも寄り添うからで
す。

最後に、ご聖体は「尊いもの」
です。その「尊いもの」をいただ
いて、今度はわたしたち自身が、
わたしたち一人ひとりが、「尊い
もの」にさせていたただくのです。
ミサでキリストの御からだをいた
だいたわたしたちは、「尊いもの」
など無いかのように思えるこの世
へと送られていって、出会うすべ
てのものを「尊いもの」へと変え
ていくのです。

なんとご聖体のすばらしいこと
でしょう。



主任司祭から皆さまへ

新型コロナウイルス感染症について、いわゆる「五類相当」の分類へと変わりました。それでもなお、市中での感染の話は伝わってきます。それなりの感染防止対策が必要です。

その一方で、ミサをできるだけ豊かなものにしていくことは疎かにできないと思います。そこで、ミサに関していくつかのお願いがあります。

...

(1)朗読

八時半のミサ、九時半のミサについては引き続き、ミサが始まる前に朗読をしてくださる二人の方を募集しますので、ご協力ください。朗読を「お当番」制にしないのは、皆さんの積極的な「参加」を願うことです。朗読してみ

たいと考えている人はどうぞなさってください。若い人もOKです。子どももOKです。お子さん連れでもOKです。

(2)ミサ曲

昨年末よりミサの式文が変わりました。ミサ曲と呼ばれる三つの賛歌（いつくしみの賛歌、感謝の賛歌、平和の賛歌）も新しく生まれ変わりました。そろそろ九時半のミサでミサ曲を歌い始めたいと思います。一気に覚えるのは難しいので、最初は「感謝の賛歌」から歌いましょう。そして、少しずつ慣れていきましょう。八時半のミサは従来通り唱えることとなります。

(3)奉納

すでに実施していますが、九時半のミサでは奉納を行います。信徒用のホスチアではなく、司祭用

のホスチアとぶどう酒と水を奉納します。わたしたちの教会は子どもたちが献金を運ぶ「お仕事」をしてきましたから、これからも子どもたちが先頭になって、献金、ぶどう酒と水、ホスチアを祭壇にお献ぎしましょう。献金を運ぶ子どもたちは誰がしてもよいです。

(4)侍者

八時半のミサと九時半のミサで、小学生の子どもたちが侍者をやり始めました。まだまだ慣れない様子ですが、教会の皆さんのあたたかいまなざしをお願いします。侍者をする子どもたちは、できる限り、毎週、教会に来てください。お願いします。

(5)共同祈願

共同祈願はこれまで通り一緒に声を合わせて唱えましょう。そのほうが、ここをより合わせて祈ることになると信じています。

(6)主日のミサの依頼

主日のミサで祈っていただきました

いことがありましたら、遠慮無く主任司祭に伝えてください。ミサの中ではお名前を読み上げません。主日のミサは教会の皆のためにささげられるものだからです。司式司祭がこころの中で祈りますので、それに合わせて依頼された方も祈ってください。ただし、主日のミサで依頼のあったご意向は、次の日に主任司祭がもう一度ささげるように努めますので、ご安心ください。

以上となります。皆様のご理解とご協力をお願いします。

